

NEWSLETTER No.12

2007.10.01

I フィッシャー駐日ドイツ連邦共和国公使講演会

I フィッシャー公使講演会

II 第3回DAADセンター長会議

▼ DAADセンター長会議に出席して

III 日独共同大学院プログラム開始

IV DESK研究プロジェクトより

▼ 拡大EUのフロンティア —トルコとの対話

V DESK教育プログラムより

- ▼ Bericht über die Konferenz
„Migration in und nach Europa“
- ▼ ASKO=DESK欧州研修セミナー
- ▼ 日独学生セミナー
- ▼ 日独通訳者養成セミナー
- ▼ 海外調査奨学助成金制度

VI 関連情報

- ▼ 関連催事のご案内
- ▼ 関連出版書籍のご紹介

2007年6月14日、ベルント・フィッシャー駐日ドイツ連邦共和国公使が駒場キャンパスを訪れ、「日本とEU」と題した講演を行いました。

2007年はローマ条約が調印されて50年目を迎える記念すべき年であり、また、上半期はドイツがEU議長国を務めました。そのような立場も反映し、公使の講演は、「EUとは何か?」、そして「なぜ日本=EUのパートナーシップなのか?」という2つの問題を軸にして進められました。

講演では、まず現在のEUのもつ影響力の大きさを紹介した後、そのような影響力をもつにいたるまでの歴史や制度的な枠組みといった、EUの基礎的知識の解説がありました。その後、EUの制度改革問題など、現在ドイツがEU議長国として取り組んでいるさまざまな課題が紹介されました。

次に、今日ますます緊密化されてきた日本=EU関係の現状や共通して取り組むべき課題について論じられました。日本とEUの関係は、年一回定期的に開催される日本=EUサミットなど制度的な枠組みを発展させてきました。日本とEUが協力を発展させてきた背景に

は、地球温暖化などグローバルな規模で取り組むべき問題が増大したことがあります。そのため、利益と価値を共有する日本とEUがリーダーシップを取り、これらの問題に取り組む必要があるということでした。温暖化以外にも、国際刑事裁判所、WTOドーハラウンド、核不拡散問題、国連改革、知的財産権保護など、多様な問題について、日本とEUの協力が欠かせないことが強調されました。

講演会では、前期課程でドイツ語を履修している学生を中心に多くの観衆が公使の話に耳を傾け、講演のあとには、学生から多くの質問が寄せられました。

DESKでは、2006年12月6日にも駐日欧州委員会代表部のライテラー公使を招いての講演会を開催し、日本=EU関係についての議論を深めました。今後も学生が日欧関係の最前線で活躍する外交官と交流できる企画を催していく予定です。

講演には「未来に向けたパートナーシップ」という副題がつけられていましたが、本講演会はドイツがEU議長国を務めてきた2007年上半期の締めくくりにあふさわしいものとなりました。



シンポジウム

ローマ条約調印から50年—EUはヨーロッパをどう変えたのか

- ▼ 2006年11月30日(金) 18:15~20:00 ▼ 東京大学駒場キャンパス学際交流ホール
- ▼ 講演予定: 川村陶子(成蹊大学)、五月女律子(北九州市立大学)、森井裕一(東京大学)、吉田徹(北海道大学)

Ⅱ 第3回DAADセンター長会議

DAADセンター会議に出席して

言語情報科学専攻 博士課程 山川智子

2007年6月12日(火)から15日(金)にかけて、アムステルダム(オランダ)のドイツ研究所(Duitsland Instituut Amsterdam)で開催された、DAADセンター会議(Internationale Doktorandenkonferenz)に出席した。これは、DAADの支援を受けて活動する世界各国のドイツ・ヨーロッパ研究センターの教育プログラムに参加している博士課程の学生のための合同会議である。今回のテーマは、「グローバル化世界におけるドイツ(Deutschland in einer globalen Welt)」というものであった。会議の目的は社会・政治の側面でのグローバル化だけではなく、学問理論のグローバル化をも視野にいれ、双方の連携を築き上げることにあった。特定の分野に限ることなく、あらゆる研究分野の博士課程の学生が参加し、第一線で活躍する研究者と、グローバル化が進む時代のドイツ研究の意義をどのように受け止め、それを研究にどのように反映させていくかについて再考し、議論を交わした。

会議のプログラムは曜日ごとにテーマが決められており、そのテーマに関する研究がさらに各パネルに分類され、報告された。会議の出席者は多数いたが、パネルごとに部屋を割り当てるということもなく、全員が順番に発表を聞く、というやり方で会議は進められた。政治、経済、歴史、文学、教育、移民問題などの多岐にわたるテーマを、わずか数日で議論したの



で、会議全体の様子を紹介するためにも、扱ったテーマを日程順に記しておきたい。

12日(火): テーマ「新しい国際政治」——パネル①「グローバル化と政治基盤」、パネル②「グローバル化におけるヨーロッパとその市民」、パネル③「国民国家を越えて: 新しい政治アクター」

13日(水): テーマ「グローバル化における政治経済学」——パネル④「生産に関わる者にとっての政治と経済」、パネル⑤「局地的、地域的、グローバル・ガ

バナンスの問題」、パネル⑥「経済空間と通貨の政治」

14日(木): テーマ「文学、文化、アイデンティティ」——パネル⑦「グローバル化の象徴」、パネル⑧「グローバル化について学ぶことができるか?」、パネル⑨「グローバル化と移民」

15日(金): テーマ「国を越えた歴史・グローバル・ヒストリー」——パネル⑩『「広域世界(Wider World)」の中におけるドイツ」、パネル⑪「世界都市もしくは世界権力: ベルリンとベルリン共和制」

博士課程の学生の研究発表以外にも、多方面で活躍する研究者たち——トリア大学のハンス・マウル教授(Prof. Dr. Hanns W. Maull)、シカゴ大学のサスキア・サッセン教授(Prof. Dr. Saskia Sassen)、ミュンスター大学のブリギッテ・ヤング教授(Prof. Dr. Brigitte Young)、ブリティッシュ・コロンビア大学のクルト・ヒュプナー教授(Prof. Dr. Kurt Hübner)、ウィスコンシン大学(マディソン)のミラ・マルクス・フェレー教授(Prof. Dr. Myra Marx Ferree)、アムステルダム大学のレオ・ルカーセン教授(Prof. Dr. Leo Lucassen)、バーミンガム大学のサイモン・グリーン博士(Dr. Simon Green)、ソフィア・聖クリメント・オフリドスキ大学のマルク・アレンハーベル教授(Prof. Dr. Mark Arenhövel)、ドイツ研究学際センター(パリ)のミハエル・ヴェルナー教授(Prof. Dr. Michael Werner)らによる講演が連日開催された(紙面の都合で講演テーマは省略)。

私は、14日(木)のパネル⑧「グローバル化について学ぶことができるか?」で、教育政策について研究しているフランス人の学生とともに研究報告をし、主に教育の視点からドイツのグローバル化をどう捉えるかという議論に参加させていただいた。私が唯一のアジアからの学生ということもあり、日本にとってのドイツ・ヨーロッパ研究のあり方に関心を持つ参加者が多く、パネル報告中に限らず休憩中にも、多くの方たちが私に質問を投げかけてくださった。以前、DESKから助成金をいただいて、ヨーロッパ・スクールを訪問したことも発表内容に含めたところ、参加者の中にこの学

校の卒業生がおり、臨場感あふれる議論にすることができた。

ドイツ・ヨーロッパに関する論文を執筆中であるという、似たような環境にある各国からの学生たちの自助努力の姿を目にし、日本人がドイツ・ヨーロッパ研究をし、それを「ヨーロッパ」の地で発表する意義について再考する機会となった。さらに、研究上のネットワークを広げることができ、多くのことを学ばせていただいた。

一つ現地で考えさせられたのは、使用言語についてである。この会議での使用言語はドイツ語と英語であった。英語を母語とする参加者は、ドイツ語がかなりできる人でも、みな英語で発表をしていた。ドイツに関する研究をするにあたって、ほとんどの参加者がドイツ語を学習している訳であるが、研究発表の際のこうした「言語選択」においても、色々な意味での「世界の言語力学」を目の当たりにした思いがした。



この会議に参加するにあたっては、ドイツ研究所のスタッフであるステファン・フォークト博士(Dr. Stefan Vogt)と、かなり前から電子メールで頻りに連絡を取り合った。氏とは発表要旨や発表原稿の送付のやり取りのみならず、旅行経路、宿泊先、滞在情報などを適宜確認しあうことができた。フォークト氏による、参加者全員に対する充実したサポートに感謝の念が募るばかりである。さらに、幅広い研究背景をもつ参加者が一堂に会する会議のプログラムの構成を練り、発表者の研究に生産的なコメントを与えるために各パネルにコメンテーターを配置するなど、会議の運営にご尽力くださった、ドイツ研究所のTon Nijhuis所長をはじめ、すべての関係者の方たちに感謝したい。最後に、私にこうした機会を与えてくださったDESKに心から感謝申し上げる。

Ⅲ

日独共同大学院プログラム開始

Japanese-German Graduate Externship
Internationales Graduiertenkolleg

日独の大学が協力して大学院の教育研究を共同で行うことを支援する日本学術振興会とドイツ研究協会の「日独共同大学院プログラム」(平成19年度)に東京大学大学院総合文化研究科とマルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学が採択されました。

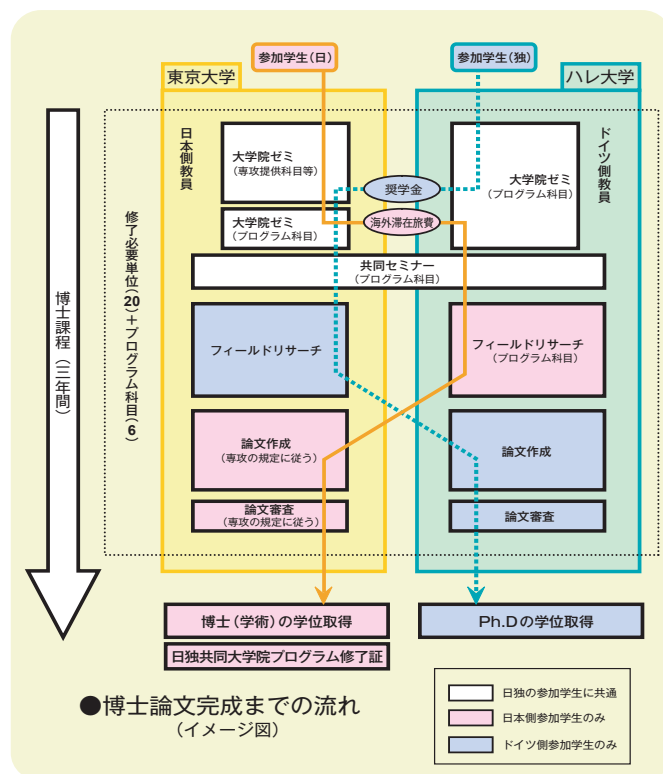
2007年9月から2010年8月までの期間について、総合文化研究科博士課程在籍者のうち、年間6名程度が10ヶ月以内、ハレ大学に滞在することが可能になります。また、博士論文作成のためのドイツにおける現地調査旅費の助成も実施します。教員の相互派遣も行われます。総合文化研究科とハレ大学のあいだの学生・教員の相互派遣は、これまでの研究教育上の交流の実績に基づいて2006年6/7月に両者のあいだで締結された「学術交流協定」ならびに「学生交換に関する覚書」に基づいて行われます。

日独共同大学院プログラムは、このような集中的な学生・教員の相互派遣

および大学院博士課程における複数指導教員制度の導入などによる共同教育を通じて、日独の大学院における組織的な学術の国際交流を促進し、博士課程における若手研究者の養成及び国際的な共同研究の充実を目指すものです。

また、毎年2度企画される共同セミナーを通じて、学術交流や共同研究課題(市民社会の形態変容—日独比較の視点から)に関する共同研究も進められます。このプログラムは総合文化研究科の教育プログラムですが、修士課程欧州研究プ

ログラム(ESP)など、これまでのDESKの研究・教育実績をふまえて発足するものであり、本プログラムに参加する学生もDESKの活動に積極的に関与することが求められます。



Ⅳ

DESKの研究プロジェクトより

『拡大EUのフロンティア—トルコとの対話』出版

2006年11月10日に開催された同名のシンポジウムの成果も含めた八谷まち子編著、間寧、森井裕一著『拡大EUのフロンティア—トルコとの対話』が、信山社より10月中旬に出版されます。

昨年のシンポジウムは、DESKと科研費「地域的安定における地域統合の役割の序論的研究—EUとトルコを例に」の共催で開かれ、トルコのEU加

盟問題について、三人の著者が、それぞれ「EUからの視点」(八谷)、「トルコからの視点」(間)、「ドイツからの視点」(森井)と題して研究報告を行いました。

本書では、EU拡大の展開中、もっとも挑戦的課題を投げかけるトルコと、その課題に対するEU・加盟国(ドイツ)の議論状況を総合的に考察し、各当事国の現状を、国際関係、国内政治、歴史の視点から論じ、「拡大」の本質的課

題を明らかにしています。本書は、EUの将来像を探るために必読の書となります。



V DESKの教育プログラムより

DESKでは修士課程を中心に学生への奨学助成金の支給や学生セミナーの開催などを通じて教育活動を行っています。このなかから、DIGES II (社会科学) プログラムに所属し、ドイツに留学期間中に出席した小林薫さんの会議への参加記、および、今秋の2つの学生セミナー(ASKO=DESK 欧州研修セミナー・日独学生セミナー)の概要について紹介します。これらのセミナー参加にもセンターから奨学助成

金が支給されています。

また、DESKでは、筑波大学の相澤准教授の指導のもとに行われてきた日独通訳者養成セミナーの活動についても紹介します。

なお、後期の奨学金の募集は10月ごろに行われる予定ですので、ご関心のある方はセンターホームページをご覧ください。

Bericht über die Konferenz „Migration in und nach Europa - Ein Prozess der Leben verändert“ Kaoru Kobayashi (Universität Tokyo, DIGESII, Sozialwissenschaft)

Vom 8. bis 11. Februar 2007 fand in der Botschaft der Tschechischen Republik in Berlin eine Konferenz über Migration in Deutschland und Europa statt. Diese Konferenz wurde gemeinsam von der Bundeszentrale für politische Bildung und der Heinz-Schwarzkopf-Stiftung Junges Europa veranstaltet. Ungefähr achtzig junge Akademiker, die an der Universität Soziologie, Politik und Jura studieren, nahmen an dieser Konferenz teil und führten zahlreiche Diskussionen zur Einwanderungspolitik und den Verhältnissen in Deutschland. Die Konferenz bestand unter anderem aus der Diskussion verschiedener Arbeitsgruppen, den Vorträgen von Immigrationexperten, sowie Streitgesprächen deutscher Politiker unterschiedlicher Parteizugehörigkeit.

Das herausragendste Ereignis der Konferenz war die Teilnahme der bekannten deutschen Politikerin und ehemaligen Bundestagpräsidentin Frau Prof. Dr. Rita Süssmuth. Sie wird oft als die „Mutter“ der Einwanderungspolitik in Deutschland bezeichnet und ist insofern vielleicht auch die „Mutter“ meines Studiums.

2004 habe ich einen englischen Zeitschriftenartikel von Prof. Dr. Süssmuth über die Einwanderungspolitik in Deutschland gelesen. Hierin schrieb sie über das neue „Zuwanderungsgesetz“. Ich fand dieses Thema so interessant, dass ich angefangen habe, noch mehr Artikel über die deutsche Einwanderungspolitik zu sammeln und mich in der Folge entschieden habe, das Thema zum Schwerpunkt in meinem Master-Studium zu machen.

Seit dem Jahr 2000 wird das Thema Zuwanderung ernsthaft diskutiert und die so genannte „Einwanderungskommission“ wurde am 4. Juli 2001 gegründet. Diese Einwanderungskommission war auch unter dem Namen „Süssmuth-Kommission“ bekannt, da Frau Prof. Dr. Süssmuth die Vorsitzende war. Nicht zuletzt deswegen ist sie eine wichtige Persönlichkeit in der Debatte über die deutsche Einwanderungspolitik.

Nachdem ihr Vortrag auf der Konferenz beendet war, hatte ich die Gelegenheit zu einem persönlichen Gespräch. Ich erzählte ihr, dass ich bereits an einem Immigrations-

Symposium, dass in Tokio im März 2006 stattgefunden hatte und bei dem sie als Sprecherin aufgetreten war, teilgenommen hatte. Sie sagte mir, dass Deutschland und Japan als Industriestaaten eine ähnliche Struktur haben und die beiden so genannte „Pull-Länder“ von Immigranten seien, weswegen Deutschland auch ein interessantes Fallbeispiel für Japan sei. Außerdem sprach sie mit mir über Kanadas Multikulturalismus, der bekanntlich ein Vorbild für die deutsche Immigrationspolitik ist. Ich hatte den Eindruck, dass dies auch ihre Überzeugung ist und das hierdurch ihre Vorstellungen zur Immigrationspolitik in Deutschland sehr beeinflusst worden sind. Mir ist auch fest in Erinnerung geblieben, dass sie das Wort „respektieren“ lieber verwendet als das „tolerieren“. Hierzu meinte sie, dass es für das Zusammenleben wichtig ist, den Anderen zu „respektieren“. Es war ein großes Glück für mich, bei dieser Konferenz mit Frau Süssmuth sprechen zu können.

Ich habe auch viele junge deutsche Akademiker kennen gelernt, mit denen ich Email-Adressen ausgetauscht und über die Immigrationspolitik diskutiert habe. Viele von ihnen hatten Interesse am Thema Immigration in Japan und fragten mich nach den Problemen bei der Einwanderung in Japan und danach, wie die Einwanderungspolitik in Japan aussieht.

Leider gibt es noch keine richtige Einwanderungspolitik in Japan. Aber ich bin mir sicher, dass Einwanderungspolitik in der nahen Zukunft auch in Japan ein wichtiges Thema sein wird, insbesondere wegen der Frage der Integration der Einwanderer. Ich möchte deshalb besonders über die Möglichkeiten und Probleme der Integration der Immigranten nachdenken. Eine Freundin sagte mir auf der Konferenz, dass das Thema Immigration selbst nicht sehr neu sei, die Frage der Integration der Einwanderer hingegen insbesondere in den letzten fünf Jahren an Bedeutung gewonnen hat.

Ich schreibe jetzt an meiner Magisterarbeit über die Einwanderungspolitik in Deutschland. Die auf der Konferenz gemachten Erfahrungen helfen mir dabei sehr. Besonderes Interesse habe ich an der Frage, wie man mit den Anderen zusammenleben kann. In diesem Zusammenhang halte ich den Aspekt des Unterschiedes zwischen „Respekt“ für den

Anderen und „Toleranz“ gegenüber dem Anderen für bedeutsam.

Jetzt habe ich viele Freunde und Bekannte in Deutschland, die sich wissenschaftlich mit diesem Thema auseinandersetzen und mit denen ich Informationen und Meinungen austauschen kann. Ich habe Frau Prof. Dr. Süssmuth gesagt, dass ich meine Masterarbeit ihr zukommen lassen möchte sobald sie fertig ist. Dies ist somit eine zusätzliche Motivation für mich noch gründlicher zu forschen, um so die bestmögliche Masterarbeit zu schreiben.



Mit Prof. Dr. Rita Süssmuth

ASKO=DESKヨーロッパ研修セミナー

The History and Future of European Constitution-Building Process

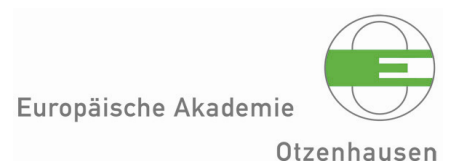
9月20日より10月1日にかけて、ASKOヨーロッパ財団、トリア大学(ドイツ)、オツェンハウゼン・ヨーロッパ・アカデミーとの協力の下、ASKO=DESKヨーロッパ研修セミナーを開催しました。森井裕一准教授の引率のもとESPの学生を中心に11名の学生が参加しました。学生には、DESKより助成金が支給され、セミナー参加費や渡航費用にあてられました。

セミナーのテーマは「ヨーロッパ憲法化プロセスの歴史と将来」で、交渉合意から批准拒否へといたった欧州憲法条約の歴史的・思想的背景を学び、今後の展望を議論しました。セミナーは合宿

形式で行われ、ザールラント州にあるオツェンハウゼン欧州アカデミーに滞在し、J.シルト(トリア大学)、J.ニールセン=シコラ(ケルン大学)、S.ハーニッシュ(ハイデルベルク大学)、J.ヴォルフ(ブレーメン大学)などの講師陣から講義を受け、また、学生たちが加盟各国の首相・外相に扮してのロールプレイなどを行いました。さらに、期間中には、ルクセンブルクのヨーロッパ司法裁判所、ストラズブール(フランス)のヨーロッパ人権裁判所、そしてボンのドイツ学術交流会(DAAD)なども訪問しました。

本セミナーのプログラム作成にあたってご尽力をいただいたASKOヨーロッパ財団のマイメット氏やトリア大学のシルト教授など関係各位のおかげで、学生たちは充実した研修セミナーを受講する

ことができました。学生の参加記などは次号のニュースレターに掲載されます。



ASKO EUROPA - STIFTUNG
wir beleben Europa

日独学生セミナー

10月5日より10月12日にかけて、東京大学とマルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学(ハレ大学)との協力のもと、日独学生セミナーが開催されます。



と、日独学生セミナーが開催されます。2005年での東京開催に続き、今回はハレ大学での開催になります。

東京大学からは、教員6名と、学部、修士課程、博士課程の計15名の学生が参加し、学生セミナーやシンポジウムが行われます。学生セミナーでは、戦争裁判、女性運動、国籍法など広範なテーマについて、学生全員がドイツ語でそれぞれの研究報告を行います。

東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学との間で日独共同大学院プログラムが開始されたため、共同研究課題である「市民社会の形態変容—日独比較の視点から」を中心に、今後は年に2回(東京大学とハレ大学で1回ずつ)、同様のセミナーやシンポジウムが行われる予定です。次回は、2008年3月に東京大学でシンポジウムとセミナーが企画されています。

日独通訳者養成セミナーについて

筑波大学 准教授 相澤啓一

DESKの活動の一環として日独通訳者養成セミナーのプログラムを立ち上げて、早くも5年になります。本年度も、東京大学駒場キャンパスにおける毎月（原則として最終日曜日、13時～18時）の定例会を中心に活動を続けてきました。現役通訳者の桑折千恵子さんや蔵原順子さん、そしてドイツ人ネーティヴとしてSven Koerber-Abeさんが定期的に参加してくださるおかげで、ひと月に一回という最低限のトレーニング頻度ではありますが、毎回とても充実した練習時間を作ることができました。もう一方の柱である集中合宿セミナーは2006年9月に浦和の国際交流基金の施設を借りて実施しましたが、07年は講師陣の時間的制約もあって冬以降に先延ばしせざるをえませんでした。やはり集中セミナーの効果は大きいので、次回の集中セミナーで改めて全体のテンションを高めたいと考えています。

私たちの通訳者養成セミナーは一種の過渡期に差しかかったようで、さまざまに「巣立って」いく人も送り出し始めています。むろんこれまでも、メンバーの方たちが、例えばドイツ大使館やベルリンの日本大使館などに就職することがありましたが、最近では、そうした方々も含めて「古顔」の参加者たちのレベルが上がり、講師役

を務めているスタッフと一緒に同時通訳ブースに入るようになったメンバーもいます。他方、学生メンバーとして参加してきた人たちの二人が、ここにきて本格的に通訳者を目指して留学することとなりました。ただし行き先は、一人はフランス、一人はオーストラリアで、二人とも苦悩の上での選択でした。日独通訳者を目指す学生が世界のどこにも勉強する場所がなく、文字通り行き場を失っている姿を象徴する現象でしたが、こうした意欲的な「卒業生」が登場したこと自体、私たちのセミナーが、通訳者になることを希望する学生たちにとって貴重な勉強場所を提供してきた「成果」であったと考えています。（なお本報告者は、そうした日独通訳者養成の制度上の問題点やカリキュラムなどについて、DESKでの活動も踏まえた現状報告を執筆しました。ご関心のある方はご参照ください。Zur Ausbildung der japanisch-sprachigen Konferenz-dolmetscher für Deutsch. 筑波大学文芸・言語専攻発行、「文藝言語研究」第52号（言語篇）、2007年、所収）

昨年からはこのDESK日独通訳者養成セミナーの名前で、新たに現役通訳者達の合宿セミナーもスタートしました。日独両言語間のプロ通訳者の数はごく限られていますが、本セミナーの定例講師役

を務めている3名を含めて自己研鑽の必要性を痛感しており、自費で夏季合宿を行なうこととなったという次第です。今年は12名程度の限られた人数の現役通訳者と日本語の達者なドイツ人が、つくば市の産業総合研究所の同時通訳設備をお借りして4日間の合宿を行いました。開催地の名前をもじってTsukubersheimer Seminarと名づけたこの合宿にこれまでの養成セミナー本体から参加するのは今のところ講師の3名だけですが、DESKのセミナーの名前を借りて同じ屋根の下の組織とすることにより、これまでのセミナー本体のいわば上級者の部と位置づけることによって、今後養成セミナー本体との教材やカリキュラムの共有化という形でのフィードバックのみならず、将来的には可能な範囲で相互交流や共同研修なども行い、有機的に交流・協同していけることを考えています。



DESK海外調査奨学助成金の募集について

DESKでは、学生のドイツ・ヨーロッパ研究を支援するため、学生の海外調査に対する奨学助成を行ってきました。2006年度より海外調査奨学助成金制度を大きく改編し、事業の更なる充実を図っています。大半の奨学助成金はDESKの教育プログラムと連動し、学生の所属によって該当するプログラムが変わってきます。詳しくは、センター・ホームページ(<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/education.html>)の各プログラムの情報を参照してください。

2007年度前期には、厳正な審査の結果、学部生4件、大学院生20件の海外現地調査や海外セミナー参加に対して奨学助成金が交付されました。後期には、主に冬休み期間の現地調査を支援するため、10月に応募を受け付け、12月に給付するという予定を組んでいます。募集情報は、主にセンター・ホームページ上で告知されますので、ご関心のある方は、注意してください。

VI

関連情報

関連催事のご案内

9月20日～ 10月1日	ASKO=DESK欧州研修セミナー The History and Future of European Constitution-Building Process (ASKO欧州財団、トリア大学、オッツェンハウゼン欧州アカデミーとの共催) @オッツェンハウゼン(ドイツ・ザールラント州)、ルクセンブルクなど
10月2日	Prof. Dr. Georg Milbradt ドイツ・ザクセン州首相講演会 パネルディスカッション「気候変動と再生可能なエネルギーの挑戦」 @東京大学 駒場キャンパス I 18号館ホール
10月5日～12日	東京大学/ハレ大学 日独学生セミナー・シンポジウム @マルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学
11月17日	国際シンポジウム 『地域史』をどのように構想・叙述し、どのように教育するか—バルカンと東アジアの事例から @東京大学 駒場キャンパス I 18号館ホール
11月27日	Prof. W.D.Gruner教授を招いてのワークショップ @東京大学 駒場キャンパス I
11月30日	シンポジウム「ローマ条約調印から50年—EUはヨーロッパをどう変えたのか」 講演予定者: 川村陶子(成蹊大学)、五月女律子(北九州市立大学)、 森井裕一(東京大学)、吉田徹(北海道大学) @東京大学 駒場キャンパス I 学際交流ホール
12月3, 4日	文明間の対話に関する国際シンポジウム (ベルリン日独センター、ドイツ大使館、フランス大使館などとの共催) @東京大学 駒場キャンパス I 数理科学研究科棟大講義室
2008年3月(予定)	東京大学/ハレ大学 日独学生セミナー・シンポジウム @東京大学 駒場キャンパス I



関連出版書籍のご案内

Peter Pantzer und Sven Saaler. 2007. Japanische Impressionen eines Kaiserlichen Gesandten. Karl von Eisendecher im Japan der Meiji-Zeit / 明治初期の日本—ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より (München: Iudicium / ドイツ東洋文化研究協会刊行、東芝国際財団助成) ISBN 978-3-89129-930-2

19世紀末期は、日独関係の黄金時代とも言われている。両国が歩み寄りを見せる過程で、駐日ドイツ帝国公使、カール・フォン・アイゼンデッヒャーが果たした役割は大きい。アイゼンデッヒャーは1875年から駐日弁理公使、1880年から特命全権公使を務め、1882年まで東京に滞在した。この7年の間にドイツ公使館が新築され、さらに、後のヴィルヘルム二世の弟ハインリヒ親王が来日するが、アイゼンデッヒャーはその折々、日本のドイツに対する親近感の向上に努めた。治外法権を巡って、ときとして摩擦も生じたが、アイゼンデッヒャーが井上馨外務卿の不平等条約改正の要求を強く支持したことが、両者の接近をもたらした、日独関係が強化された。

アイゼンデッヒャーのように海軍将官から外交官に転身するのは珍しい。しかし、それに勝るとも劣らず希少なのが、彼が日本での任務期間中に収集し、その後、ドイツに持ち帰った史料である。アイゼンデッヒャーの3冊の写真帖と複数になる自作の水彩画等のアルバムは現在、ボン大学日本文化研究所に所蔵されている。当時の列強の政治的動向のみならず、明治時代の日独関係を生き生きと伝え、さらにアイゼンデッヒャー公使の活躍を魅力的な形で教えてくれるこの貴重な視覚的史料を、ここに初めて公開する。



『図説ドイツの歴史』

石田勇治東京大学教授編著の『図説ドイツの歴史』が河出書房新社より出版されます。



ベルリンの壁が開放されてすでに17年。
かつて同時代人として目の当たりにした出来事が、
いまや歴史の一コマになろうとしている。
実際、分断時代の東西ドイツを知る者にとって、
壁崩壊後のドイツの変貌ぶりには目を見張るものがある。
あえて一言で表現すれば、それはヨーロッパと一体化するドイツの姿である。
～プロローグより～

ヨーロッパのなかで自らをどのように位置づけるかを問い続け、歴史の波間で揺れ動いてきたドイツ。本書は近代以降のドイツ史に焦点をあてて、ナポレオンの衝撃から自由と統一をめぐる闘い、帝国と世界戦争、ナチズムとホロコースト、冷戦下の分断とその克服を経て、今やEUの主導国となったドイツの激動の歴史に迫ります。
DESKと関わりの深い4人の研究者による共作です。

目次	
1 中世から初期近代	7 ナチ・ドイツ
2 ナポレオンの衝撃	8 ホロコースト
3 自由と統一をめざして	9 東西ドイツと冷戦
4 ドイツ帝国	10 ニつのドイツ
5 第一次世界大戦	11 東西ドイツの統一
6 ヴァイマル共和国	12 過去の克服
	13 統一ドイツとEU

定価 1,890円

2007.10.17発売予定

著者 石田勇治(編著)、辻英史、福永美和子、川喜田敦子

『EUスタディーズ1 対外政策』

植田隆子国際基督教大学教授・東京大学DESK特任教授が編集した『EUスタディーズ1 対外政策』が勁草書房より出版されました。EUの対外関係の発展を、安全保障・経済関係など、各章テーマ別に「歴史をおってわかりやすく」というコンセプトでバランスよく概説する体系的テキストです。



第1章 法的基盤	中村民雄
第2章 共通外交と安全保障	植田隆子
第3章 拡大と対外関係	東野篤子
第4章 西バルカン・トルコへの拡大と欧州近隣諸国政策	東野篤子
第5章 対外経済関係	大平和之
第6章 開発協力政策	大隈 宏
第7章 グローバル・ガバナンスへの役割	森井裕一
第8章 日本＝EU通商・経済関係	大平和之
第9章 日本＝EU政治・安全保障関係	植田隆子
第10章 アジアへの戦略	渡邊啓貴
終章 欧州の大戦略	パスカル・ヴェネツソン
補論 共通外交安全保障政策(CFSP)と国連総会における投票行動	福田潤一

最新の情報・イベントについては、ホームページ
もご覧下さい

<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>

DESK事務室

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部
9号館3階311号室

Tel/Fax : 03-5454-6112

E-mail: desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp